

大阪大学大学院院生 屈 帥帥

10月、安野の中国人被害者の記念活動で、大連市旅順から被爆者遺族の姉妹二人が4泊5日の日程で来日した。私は通訳として全日程に同行した。福岡空港で出迎えて広島へ案内したが、二人はスーツケースではなく、それぞれリュック一つの軽装だった。広島での夕食を兼ねた初の打ち合わせで、自分や家族のために「薬」を買いたいと話した二人は、多くの病気を患い、自分たちの体を心配しているようだった。

2日目の午後、市民集会が開催された。二人は私たち通訳と一緒に一番後ろの席に座っていたが、集いが終了した後、何人かの参加者が話しかけてきた。2回目の来日である妹さんは、前回会ったという加藤陽祐さんを見て、名前は忘れたものの、チラシを指しながら「会ったことがある」と言った。話の中で、加藤さんの年齢や健康についても触れ、健康に関する話題を特に気にしている様子だった。最後に妹さんは「次にいつ広島に来られるかわからないので、ぜひ私の故郷である旅順に遊びに来てください」と誘った。次に別の人が来て、二人に対して「ごめんなさい」と謝った。二人は突然の謝罪に戸惑い、「なぜ？」と尋ねた。「かつて日本人が犯したことに對し、謝罪します」と答えたのに対し、二人は「過去のことは過去のことです。これからの友好と平和を願っています」と答えた。

3日目は安野で、追悼式の来賓と挨拶したり、記者のインタビューを受けたりする時に、妹さんの発言には、必ず「日中友好の願い」が含まれていた。また、善福寺の追悼法要で感想を話した時も、二人は自分や家族の苦痛には触れず、戦争のない世界と日中友好について繰り返し語った。これは彼女たちだけではなく、すべての中国の民衆の真の声ではないかと感じている。

被爆地である広島に来た被爆者の遺族は、広島で地元の人と交流し、共に友好と平和の重要性を語る

ことで、自分たちの訪問及び日本市民との民間交流こそが日中両国の友好関係を維持し深めていくための「薬」であると感じたのではないかと。

4日目、二人は平和公園を訪れ、金子哲夫さんの案内で資料館や公園内をあちこち見学した。その後、金子さんが強調した「唯一の国立の記念施設」——国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で父親の名前と遺影を登録した。同行したテレビ局の記者の質問に対し、二人は非常に緊張して、うまく答えることができなかった。しかし、祈念館を出る直前、二人は小さな声で慎重に質問した。「原子爆弾の放射線による病気は遺伝するのか？」と。しかし、金子さんの話によると、「その影響は未だ解明されていない」という。初日の薬を買いたいという話を結びつけると、これは彼女たちがずっと知りたかった話ではないか。心の底でずっと心配していたのではないかと。資料館を見学したこともあり、また、広島にいる最後の機会と思って、健康への不安がやっと口に出たのだろう。

金子さんと別れる際、二人は金子さんの年齢を聞き、元気な体を羨ましがりながらも、「どうぞお体に気をつけてください」と言った。

二人は広島訪問で、日中友好の発展のために「薬」を持ってきた。他方で、自分たちの健康を心配する彼女たちは、広島市民の元気な様子に接し、市民たちとの交流を通じて、父親を追悼する活動への参加や、さらには祈念館に父親の名前と遺影を登録することで、自らの健康不安を打ち明け、その不安を少しずつ癒す一歩を踏み出したといえるだろう。

これから、被爆二世を含む被爆者の子孫たちに対して、健康不安を和らげていくための「薬」をどのように提供していくかが、我々に課せられた重要な課題であると考えている。

お互いに相手の「薬」となること。そこに日中民間交流の意味があるのではないだろうか。